

みずみずしい感性が紡ぐ、現代の聖女伝説

知人の紹介で、本書の原稿を読む機会を与えられた。沖縄県の北西に位置する伊平屋島に伝わる貞女伝説をベースに、作者が新たな生命を吹き込んだ『現代の聖女物語』である。

結婚して半年後、漁に出たまま戻らない夫・太郎の帰りを、加那はひたすら待ち続ける。帰還は不可能と、太郎の友人たちが再婚の申し込みをするが、加那の決意は固い。身の危険を案じ、神隠しを装い、泉が湧き出る不思議な岩の近くで、孤独に耐えながら待ち続ける。

一途に、清澄な心を保ち続けるという設定にいささかの不自然さも感じさせない。『七公三民』という過酷な施政下にあつて、なお遅く生きる島民の描写もみずみずしく、彼らの息づかいまで聞こえてくるようだ。

驚くことに、作者が六十歳のときの作品である。地元の議員も務めたことがあるというが、いったいどのようなにして、これほどピュアな感性を保ち続けることができたのだろうか。人心がますます殺伐としていく現代において、このような物語を紡ぐことができたこと自体、奇跡である。

この作品を埋もれさせてはいけなかったと思った。この作品は文化遺産として後世に残すべきだ、と。

この物語が編まれて、ちょうど二十年経過した今、小さな書物にできることの意義と幸せをかみしめている。